

社会・環境関係と言説としての社会論

—ラクラウとムフの社会理論の展開の試み—

田中 宏

本稿は、社会は言説であると主張するラクラウとムフの議論を、社会・環境関係という問題領域において展開し、それを通じて社会と環境の関係についての社会理論を構築することを試みるものである。そのため、まず、システムと環境の関係を支配している三つの原理を提示し、それらが結合してどのようなメカニズムを作り上げているのかを検討する。次に、これらの原理を社会学の地平において展開するために、ラクラウとムフの議論を展開し、必要であればそれを拡張していく。また、この目的のために、ラクラウとムフの理論の中に「土台—上部構造」という枠組を導入して重層的決定という概念を展開する。

0. はじめに

E. ラクラウとC. ムフは、構造主義・ポスト構造主義の議論を摂取しながらマルクス主義の社会理論が直面していた問題を乗り越えるべく、社会を言説とみる新たな社会理論を提唱した。それは、社会の動態的構造化に焦点を据え、新しい理論的地平を切り開こうとする企てとして高く評価されるべきものではあるが、その議論の矛先がこれまでは主に批判的な方向に向けられており、言説としての社会という社会像に見合った形で具体的に社会の像を描いていくという方向への転換がこれからはなされねばならないということが、その点から見るとラクラウとムフの議論は必ずしも問題なしとは言えないということが、指摘できる（この点については、拙稿〔田中 1992a, 1992b〕を参照していただきたい）。

本稿はこの方向転換の道を探る一つの試みである（ただし、具体的レベルにまでは至ってい

ないことを最初に断っておかねばなるまい）。ところで、ラクラウとムフの議論そのものについて言うとは、それは非常に抽象度が高く、具体的に適用可能な問題領域を最初から決定しておくことができるようなものではない。しかし、何らかの問題領域を設定しなければ、社会像の描出など不可能であろう。いわば、一つの舞台の上にラクラウとムフの理論をのせ、そこで演じさせることが必要なのである。本稿においては、筆者の問題関心から、社会と環境の関係という問題領域が選択されている⁽¹⁾。この選択された領域の上で次のように問うのである。ラクラウとムフの言説としての社会という理論は、社会と環境の関係についてどのような議論を展開しうるのか。

この問題に取り組むために、ここでは以下のような手順をとる。まず前提として、社会学的レベルよりもより一般的なレベルでシステムと環境についてなされている議論を検討する。ついで、そこから得られた成果をラクラウとムフ

の議論により社会学的レベルで展開可能か否か検討し、可能であればそれがどのような形で可能なかを明らかにする⁽²⁾。もちろん、その際なんらかの問題点があればそれに対処し、必要であればラクラウとムフの議論に対して修正も加えていく。それによって、最終的には、ラクラウとムフによる言説としての社会理論という構想に沿った形で社会・環境関係についての全体像を描き出すということが目指されている。

1. システム・環境関係についての三つの原理

まず最初に、社会よりもより一般的なレベルで、システムと環境との関係について検討していこう。ここでは、自己組織系理論の創始者の一人と評価されるフォン・フェルスターの議論に依拠し、システムと環境の関係を律している三つの原理を整理し、次いで節を改めて、それらの原理を統一的に捉えることを試みることでシステムと環境の関係についての全体像を捉えることを試みよう。

まず、自明のものと思われるであろうが、欠かすことのできないものとして、次のものが第一の原理として取り出される。

原理 I = 「自己組織系なるものは存在しない」
[von Foerster 1981=1984 : 2]⁽³⁾。

これは、「秩序からの秩序原理」[Atlan 1972]などと呼ばれもするが、システムの存在についての前提を述べた原理である。システム（正確には開放システム）は、環境と接触を保ち、絶えず環境からエネルギー（あるいは負エントロピー）を摂取し、反対に環境に対してはエントロピーを排出することによって初めて存在しうる、換言すると、環境との関係がシステムの存在の基盤をなしている、ということを表明している⁽⁴⁾。

フォン・フェルスターの議論から第二原理として取り出されるのは次のものである。

原理 II = 「システムは環境を發明する」（「我々が我々の環境を知覚するとき、その環境を發明するのは我々である」[von Foerster 1981 = 1984 : 288]）。

これは、システムが環境と関係するときに実際に当該システムにとって問題となる環境は、システムとは無関係に現にそこに実在する、いわば生の環境全体、環境そのものといったものではなく、システムがその能力に応じて自らの中に内部化しているものである、と主張するものである。それは、原理 I で問題となるようなリアルな環境を、当該のシステムは、いわばどのように「生きている」のか、システムが環境との関係を「生きる」仕方についての原理、先の存在の前提を現実化する際の原理である。従って、原理 I と原理 II を掛け合わせると、次のように言うことができる — システムは外部の実在的環境とのリアルな関係に基づいてのみ存在しうるが、それはシステムによって「發明」され内部化された環境（システム内でなされる環境の記述）を媒介としているのである⁽⁵⁾。

最後に、第三の原理として次のものが抽出される。

原理 III = 「ノイズからの秩序原理」[同 : 15]（あるいは、[Atlan 1972, 1974] 参照）。

これはシステムの組織の変化についての原理である。これによると、システムを構成する組織の構造的な転換は、システムを構成している組織の中に環境からもたらされる攪乱=ノイズによって惹起され、この転換が実現されるか否かは当初はノイズであったものを当該システムが自らを組織する際の有効な情報へと変換しうるか否かにかかっている。別の角度から見ると、仮に組織が完璧なもので一切の攪乱・ノイズを

受け付けられないものであるならば、システムの組織の構造的な転換はありえないということになる。

なお、ここでノイズと呼ばれているものは、当該システムの組織にとってその構成要素ではない攪乱というように、システム相関的にネガティブな形で規定されうるのみであり、それが何かを始めから実体的に同定しうるものではない。そして、このノイズがそもそもシステムの中にしめるべき場所をもっていなかったという限りでそれは環境から侵入したとされるのである。従って、ここで言われている環境とはシステム以外のもの一般という非常に漠然とした意味で規定されているだけであり、原理Ⅰのシステムの存立の基盤となっているリアルな環境とか原理Ⅱのシステムによって発明される環境とは意味が異なっている⁶⁾。また、この原理は、システムの構造転換の引き金になるものは当該のシステムからみればネガティブなものであるということをも主張するのみであって、実際にどのような機制を通じてこの転換が実現されるかまでをカバーするものではない。この点については、あくまで対象に即して研究されねばならない問題として残されている。

2. システム・環境関係の三つの原理の統合

(1) 環境の発明としての認知の閉鎖的円環

では、これらの原理を統合し、システム・環境関係についての全体像を描くことを試みていこう。まず、原理Ⅱに関わるフォン・フェルスターの主張を紹介しよう。

フォン・フェルスターは、システムによる環境の認知とは、システムがリアリティ（リアルな環境）を「計算する」ことであるとする。こ

こで「計算」とは、狭義の数学的操作ではなく、操作や処理一般を指す非常に広い意味で用いられている[von Foerster 1981=1984 : 295]。ところで、例えば我々が時計を認知するという場合、フォン・フェルスターに従うと「我々は時計を計算（処理）する」ということになるわけだが、しかし、我々はその際、時計そのものに何らかの処理を加えているわけではない。そこで、フォン・フェルスターは、認知とはリアリティそのものの計算（処理）ではなくて「リアリティの記述を計算すること」[同]であるとする。またさらに、我々の神経活動にあってはこうした操作がより高次のレベルで繰り返されていくという神経生理学の所見を踏まえて、認知とは「記述の記述の…」計算という再帰的過程であるとする。そして最後に、記述をするということも一種の処理・操作、すなわち「計算」であるから、認知とは結局、「計算の計算の計算の…」というように、計算の無限の回帰過程である、と結論する。

このようなフォン・フェルスターの主張の意味は、システムによる環境の認知においてどのような認知が行われるかはあくまでシステムが行っている計算の回帰過程にのみ関わる問題であるということ、従って、システムによる環境の認知といっても、それはシステムが持っている計算機制（例えば、生物における神経システム）の内部で閉じており、外部のリアリティ（リアルな環境）といったものはイレリヴァントであるということである。マトゥラーナとヴァレラの用語によるならば、システムによる環境の認知はシステムの内部で「作動的閉域」[Maturana & Varela 1984=1987 : 91]をなしており、環境の認知といっても、その実質はシステム内の作動的閉域の問題だ、ということである⁷⁾。

(2) 認知・行動・環境の複合的円環 — 原理I、IIの統合

以上のごとく、フォン・フェルスターは、認知過程をシステムがもつ計算機制が作る作動的閉域の問題とすることで、認知の問題からリアリティ（リアルな環境）の問題を消去する。原理IIに関する限り、環境はシステム内的な計算機制の能力の問題に還元されてしまい、外部のリアルな環境は、その実在性が否定されるわけではないがイレリヴァントであるとして排除されるのである。しかし、ここで原理Iを想起するならば、システムにとっての外部のリアルな環境は、システム・環境関係の全体にとってはイレリヴァントなものではない。そこで、「システムとシステム外的なリアルな環境の関係」と「システム内的な「環境」」との関係が考察されねばならない。

この問題に接近するためには、我々は、「システムの内部」と「システムとシステム外的なリアルな環境との関係」を結ぶものを考えてみなければならない。この役目を担うものとして注目されるのは「行動」である。というのも、行動について考えてみると、次の二つの側面が区別されるからである。

①行動はでたらめになされるのではなく、認知に基づいたシステムの「動作」であり、いわばシステム内部の行動の記述によって導かれている。この行動の記述は、認知を構成している「記述の記述の…記述」を行動の記述へと変換したものである。この意味では行動も無限の円環としての認知過程の一環をなしているということになる。

②原理Iより、行動はリアルな環境に働きかけていることは否定できない。行動はシステムの

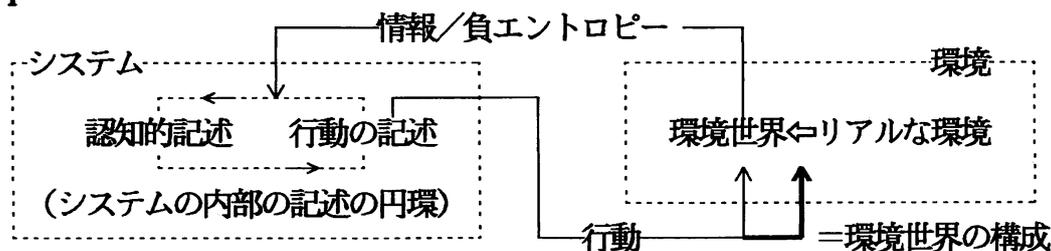
内部の円環を乗り越えて、外部の環境へと向かっていく。

では、①のような性格を持った行動が、外部の環境に働きかけるというのは一体どういうことなのだろうか。①のように行動はシステム内の記述により導かれているのだから、システムは環境に対して盲目的に働きかけるのではないし、リアルな環境というもの全体に向けて働きかけようとするのでもない。外的環境のうちシステムが有する記述と対応するとみなされるものに向けて働きかけるのである。より正確に言うと、システムが行動するときシステムにとって問題なのはリアルな環境そのものではなく、システムが有している記述が指示していると当該システムによってみなされる外的な環境の姿形であり、当該システムにとってはそれが自らにとっての外的な環境であり、それに対して働きかけるのである。こうしたことを環境の側から言うと、システムが持つ環境の記述がリアルな環境に対して覆い被せられ、その記述に沿うような相貌だけがシステムに対する環境として浮き彫りにされ、それ以外の相貌は掩蔽されてしまうのである。このシステム相関的なものとして構成された環境は「環境世界」と呼ばれる。従って、システムが行動によりリアルな環境に働きかけるということは、外的な環境をシステム相関的な環境世界へと構成・縮減することであり、そのように構成された環境世界に対して働きかけることであるという二重の性格を持つことになる。なお、言うまでもなからうが、このようにして構成されかつ働きかけられる環境世界というのは静止した一つの像ではなく、働きかけられることで変化していくものである。システムにとっては、自らの行動により変化していく環境世界を自らの行動に沿って組織するということが必要なのである。そのためには、

システムは自らの行動と相関的な動的関係におかれた環境世界についての記述を自らの内部に作り上げねばならない。換言すると、システムは、自らの行動によって変化していく環境世界と構造的にカップリングしているような環境についての記述を自らの内部に作り上げねばならない。行動によって環境世界にもたらされる差異を自らの内部における記述の差異へと変換することが必要なのである。このような差異と差異との変換関係をベイトソンにならって情報と呼ぶなら、システムは環境世界から情報を受けとり、それによって自らの内部の記述の円環を方向づけていくこと、それにより新たに行動を導き環境世界に働きかけて再びそこから情報を受け取ること、こうしたことを行い続けるのである。ただし、ここで問題なのはあくまで環境世界であり、環境世界がリアルな環境から構成されるものとはいえリアルな環境やリアルな環境の中にもたらされるリアルな変化そのものではないということに注意しておこう。システムは、「システム内の記述の円環」と「システムと環境世界の円環的關係」が構造的にカップリングするようにして環境の中で存在しているが、システムとリアルな環境との関係は、これだけに限られはしないのである。換言すると、システムとリアルな環境との間に成立する関係は、環境世界として構成された環境との関係を越えたものなのである。

ともあれ、原理ⅠとⅡの統合という範囲で考えると、「システムとリアルな環境との関係」と「システム内的な環境の記述」とは行動を介して以下のように接続される。原理Ⅱが示していたような作動的閉域をなす円環は、行動を媒介として、リアルな環境を環境世界へと構成することで、システムと外的な環境との間に「…→システム→行動→環境世界化された環境→情報→システム→…」という円環關係を作り上げる。そして、この円環的關係の実現の中で、同時にシステムは外的環境との原理Ⅰに示されている関係をも実現していく。システムは環境からエネルギー（負エントロピー）を摂取し、廃棄物（エントロピー）を環境に排出する（「…→システム→エントロピー→環境→物質・エネルギー（負エントロピー）→システム→…」）という関係である⁽⁸⁾。従って、システムと環境との間には、システム内部で作動的閉域をなす円環と、それと連動して構成される環境世界化された外部のリアルな環境とシステムとの間の円環（この後者の円環の中で、さらにシステムの存在を支えている円環が実現する）という二重の円環關係が存在する。以上のような関係は、図1のようにまとめることができる（行動は、実線で示したように環境世界に対する働きかけであるとともに、太線で示したように、リアルな環境から環境世界を構成するという作用でもあるという二重性をもつ）。

図1



(3) システム・環境関係の全体像 — 原理Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの統合

次に、さらに原理Ⅲを統合することを試みよう。なお、先にも述べたように、原理Ⅲで言われているノイズも環境も、システム以外のものというネガティブな仕方で、しかも非常に漠とした意味で言われているのであり、この原理はそれだけで積極的に展開されうるようなものではない。ここで行われる原理Ⅲに関わる議論は、あくまで先になされた原理ⅠとⅡの統合の文脈の中でのみなされていることに注意してほしい。

まず、原理ⅠとⅡの統合の結果は、次の三つの位相に関わっている。

- ①計算・記述されるもの（リアリティないしはリアルな環境）
- ②計算・記述の結果（リアリティないしはリアルな環境についての記述）
- ③計算能力ないしは記述を支配している方法＝コード

しかし、この区別が現れるのは観察者の視点に対してである。当該システム内在的にみれば、システムにとってリアリティの問題は③に基づいてなされるシステム内的な記述・計算（②）の問題に還元されてしまっている。換言すれば、システムにとっては、①と②の存在論的な差異は乗り越えられ覆い隠されてしまう。そこで、このようにして行われている位相ないしは差異の乗り越えを「同一化」と呼ぶことにし、このような差異ないしは位相上の相違にかかわらずそれが押しつぶされ両者が同一化されているという事態を「矛盾」と呼ぶことにしよう。このようにすると、先のリアルな環境の環境世界化とは、システムが行う「同一化」という作用が、

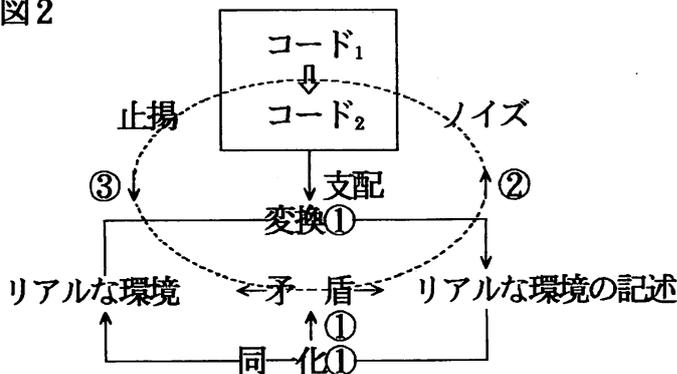
行動を介して環境において発揮されたものだ、ということになるし、逆にいうと行動を通じた環境世界化を介してシステムがもつ記述とリアルな環境との間には矛盾が発生するということになる。このような意味での矛盾は環境を認知するあらゆるシステムに伴うものであることになり、その矛盾の大きさは、当該システムの計算能力（コード）と関連しているということにもなる。システム・環境関係というのは、リアルな環境を環境についての記述と同一化すること（逆に言えば、リアルな環境を環境の記述へと変換すること）であり、環境の側に即して言うるとリアルな環境を環境世界へと構成すること、この環境世界化を介して環境についての記述とリアルな環境との間に矛盾を発生させること、こうした運動として把握できる（図2中の①、このとき記述の方法をなし、同一化・変換を支配しているコードをコード1としてある）。

さて、ここで例えば何らかの原因によってリアルな環境が変化し、それによって、システムによる環境の記述をリアルな環境が十分に担うことができなくなった — 先の言い方では、環境世界としては十分に存立しえなくなった —、あるいはシステムと環境との関係がシステムがもつ既存のコードによっては十分に制御できなくなった、としてみよう。はらまれていた矛盾は大きくなる。つまり、システム内的な環境の記述とリアルな環境との間の齟齬が、あるいは「環境の記述と構造的にカップリングした仕方を実現されていたシステムと環境世界の関係」と「システムとリアルな環境との間に成立しているリアルな関係」との間の齟齬が大きくなる。このとき、矛盾の大きさの故に、システムの既存の計算能力・記述方法では処理できないような要素がシステム内の円環の中に攪乱的に侵入するとするならば、そのときそれは

ノイズである、とみなされる（図2、②）。それでもし、システムが持っていた記述の方法＝コードが変換され（図2のコード1からコード2へ）、それによってこのノイズをシステム内的な環境の契機へと変換することをシステムが達成しえた場合、そのことにより矛盾の大きさが十分に縮小されたとみなされるならば、このことを矛盾の止揚と呼ぶことができよう（図2、③）。以上のように同一化・矛盾・ノイズ・止揚といった関係が、「システム内的な記述ないしはそれを担う環境世界」と「リアルな環境」の間には成立している（図2）。

このような関係が見えてくると、原理Ⅲは、原理ⅠとⅡの統合によるシステムと環境の間の二重の円環関係が、システムと環境の関係の中でシステムによる構成作用（環境世界化）にのみ注目していたのに対し、この二重の関係をリアルな環境に向けて位置づけ直したものである。それは、システムの構成作用によって環境世界化が行われるときそこで起きていること、そしてそのことがシステムや環境世界化にどのように作用しかえすかを明らかにするものであり、システムと環境世界との間の関係を自らの中にも含みながらもそれを越えてシステムとリアルな環境との間に成立している関係がシステムに対してもつ意義を、システムと環境世界に対してリアルな環境がもつ過剰を、

図2



あるいは環境世界化に対するリアルな環境の抵抗を、表現したものである⁽¹⁰⁾。

以上のシステム・環境関係について要点を確認しておこう — システム・環境関係には三つの原理に即して三つの水準がある。システム内的な記述の水準、システムと構成された環境世界との関係の水準、環境世界との関係を含みながらそれを越えて成立するシステムとリアルな環境との関係の水準である。第一の水準と第二の水準との間には行動を介した環境世界化の関係が、第一・第二の水準と第三の水準との間には、同一化・矛盾・ノイズ・止揚といった関係が存在するのである。

3. ラクラウ、ムフの社会理論：その輪郭

次に、こうしたシステム・環境関係を、ラクラウとムフの社会理論を基に社会学的レベルで展開することを試みてみよう。そのため、必要最小限にラクラウとムフの議論を紹介しておかねばなるまい。

まず、ラクラウとムフは構造主義の成果を受け継ぎ、社会とは関係のシステム、諸々の示差的な位置のネットワークであるとする。このネットワークが「言説」と呼ばれる。さらに、言語においてシニフィアンの意味（シニフィエ）がシニフィアン同士の差異によっているように、社会という言説においてもその構成要素（これは「契機」と呼ばれる）の意味は、それら構成要素＝契機の間どのような差異化・編制が実現されているかによるとする。この差異化・編制の実現がアーティキュレーションと呼ばれる。また、アーティキュレーションにより差異化・編制される契機は、いわゆる狭

い意味での言説に関わる言語的・記号的なものだけではなく、人間の実践も含めて物質的なものも、それらが差異化・編制される限り言説を構成しているとされる。つまり、人間も含めた様々な物質的存在がそれぞれの関係の中で意味を持って位置づけられている限り、それらは実践的に言説を、すなわち社会を実現しているのである。

しかし、構造主義の貢献を認めつつも、ラクラウとムフは、構造主義は差異の編制を所与のものとして前提してしまったと批判し、構造主義の静態的議論に対して構造化の動態的視点を導入する。それは、差異の編制の根底に差異の流動、浮遊するシニフィアンの地平（これは、「言説性のフィールド」と呼ばれる）というものを措定し、社会＝言説とは、その絶えざる流動がなんとか停止させられて一定の差異の編制が実現されている状態でしかない、とするのである。この停止というのは決定的なものではありえず絶えずその足元から脅かされており、本来的に不可能である。差異というものは常に戯れながら増殖してゆくものであり、固定されたと思われた差異の連鎖を常に別の方向へと押し流してしまうからである。この本来の流動的な世界の中になんとか停止を持ち込み、浮遊するシニフィアンをアーティキュレートし、言説を作り上げようとする試み、このような試みのもつ性格をラクラウとムフはヘゲモニーとして特徴づける。言説としての社会の形成とは、差異の戯れに抗いつつ言説性のフィールドを暴力的に停止させ、一定数のシニフィアンを一定の型へと編制することであり、それはその本性上常にその型を逃れようとするシニフィアンの運動や編制されたシニフィアンを越える過剰なシニフィアンと対抗しつつなされねばならぬもの、言説性のフィールドにおいて対抗的に獲得

された覇権だからである。

最後にもう一つ大切なことを指摘しておく、社会は言説であるとされるが、単一の言説であるとされるわけではない（その場合には、社会はアルチュセールが言う表出の全体性と化してしまう）。なるほど、言説は言説性のフィールドの中で、ヘゲモニックなものとして自らを確立しようとする。ここでは様々な可能な言説中、どの言説が顕在化されることになるか争われている。しかし、あらゆる言説形成の試みがすべて他を排除して自らのみを顕在化すべく争うというわけではない。当初は相互に顕在化を認め合うような言説、直接にその実現をめぐる競争しあうわけではない言説、「審級」を異にする言説というものもあるのである⁽¹¹⁾。これにより、社会を全体としてみれば、それは単一の言説ではなくて言説の複合体として重層的に決定されたものなのである。

4. 社会・環境関係への言説理論の展開

(1) ラクラウとムフの言説の位置

以上がラクラウとムフの「社会＝言説」理論の輪郭である。このような議論に対しては、当初より、それはいわば言説還元主義・言説本質主義であるという批判が突きつけられてきた⁽¹²⁾。こうした批判には、ラクラウとムフのいう言説は、狭義の言説（いわゆる書かれたり語られたりする言説）にとどまらず物質の編制にまで拡大されおり、そこでは狭義の言説と物質とが一緒になって作り上げる現実的な意味的な世界こそが問題なのだという点を看過しているという面もあるが[Barrett 1991 : 76]、しかし同時に、ラクラウとムフの議論の問題点を突いていることも事実である。ラクラウとムフは、

言説という概念を拡張することにより実在的なものと記号、物質と精神といった二元論的断絶を乗り越えようとしているとも評価するが、しかし、それがやや杜撰になされているようである。というのは、この乗り越えが言説という概念の拡張によって一挙に遂行されるため、記号的な地平と物質的・実在的な地平とが接続され、現実の意味的な世界が成立するメカニズムがどのようなものかということが放置されてしまうからである⁽¹³⁾。

また、このような言説概念の拡張は、ラクラウとムフにおける言説の規定の動揺としても現れる。言説は、人間も含めた物質的存在の編制からなる現実の意味的世界であるとされる場合もあれば、他方では現実の実践の前提でありそれを導く意味的・記号的レベルのものとして位置づけられる場合もあるからである（〔田中1992b〕）。

（2）言説としての社会・環境関係

さて、このような言説の位置づけをめぐる問題があるということ踏まえた上で、社会・環境関係の問題に言説としての社会という考え方を適用してみよう。なお、ここではしばらくの間、重層的決定という問題は括弧にくくっておくこととする。

まず、ラクラウとムフのいう広義の言説が人間も含めた物質的存在の編制を指すのであれば、言説としての社会という考え方は狭義の社会だけを専ら対象とするのではなく、社会と環境の関係というより広い領域に適用可能であるはずである。それは社会と環境という区別をまたいで広義の言説が成立するということを積極的に主張するものであるから、社会・環境関係という問題領域を自らのものとして受けとめ

るはずである。

しかし、システム・環境関係についての議論を踏まえると、言説の位置づけの問題が直ちに浮上してくる。システム・環境関係については、システム内的な記述の水準、システム・環境世界関係の水準、システムとリアルな環境との間に成立する関係の水準というように三つの水準が区別されえたのであり、それぞれがシステム・環境関係の形成・転換について異なった意味を持ちつつ緊密に結びついていたのであった。ラクラウとムフによる言説概念の拡張は、先にも述べたように、まさにこの拡張により社会・環境関係を言説としてその理論の射程内におさめうるのであるが、同時にそれが単なる拡張にとどまる限りこうした水準の区別を覆い隠してしまう危険もはらんでいる。そこで、我々としては、こうした水準の区別が有意義なものである限り社会・環境関係を問題にする場合にもこの区別を保持するように努めつつ、社会・環境関係という問題領域においてそれらの水準間の関係を明らかにしなければならない。

ところで、こうした区別の必要性という視点から見ると、ラクラウとムフにおける言説の位置づけの動揺ということは、単なる議論の欠陥というよりもむしろ、この必要性の徴候として読むべきであろう。そこで、この動揺を次のような区別の必要性として読みかえることにして、ラクラウ、ムフの議論を展開してみよう。まず、実践の前提であり実践を導くものとして純粋に記号的なレベルに位置づけられていた言説を、その積極的・能動的な性格に注目して「構成する言説」と呼ぶことにしよう。次に、この「構成する言説」に導かれた実践を通じて人間も含めて物質的存在の間に実現されることになる言説、人々とその実践とその実践によって志向され実践の対象として構成された物質的

存在とが織りなしているアクチュアルな意味的世界としての言説を「構成される言説」と呼ぶことにしよう。このように二つの言説が規定・区別されるならば、それぞれの言説について、「構成する言説」はシステム・環境関係について検討した際の「システム内的な環境と行動についての記述の円環」に、「構成する言説」によって導かれる人々の実践（行動）と人々の実践によって志向されて対象化された物質的存在が人々との間で織りなす「構成される言説」は行動を介したシステム・環境世界関係に対応することが明らかである。だが、同時に、システム・環境世界関係を含みつつそれを越えてシステムとリアルな環境との間に成立するシステム・環境関係に対応するものがラクラウとムフの議論からは直接は引き出しえないことも明らかになる。そこで、ここでは、「構成される言説」を含みながらも同時にそれを越えて人々と環境との間に成立するような関係を「成立する言説」と呼んで補足することとしよう⁽¹⁴⁾。こうして、我々はとりあえずシステム・環境関係の議論に対応する三つの水準の言説を手にしたわけである。そこで、以下ではそれら区別された言説を、システム・環境関係についての三つの原理を踏まえつつ、社会・環境関係に即して接続しなければならない。

(3) 言説理論の展開としての土台－上部構造

まず、ラクラウとムフが言説（＝社会）の形成をどのように論じていたか想起してみよう。それは、言説性のフィールド→アーティキュレーション→言説という図式であった。この理論構成は明らかに言語を念頭においたものであり、シニフィアン編制という純粋に記号的世界の内部にのみ関わっている。物質的世界を巻

き込んでいくというよりも、狭義の言説・記号の世界（構成する言説）の問題に閉塞しており、システム・環境関係の議論でみた原理Ⅱの水準に対応するものの内部にとどまっているのである。

では、構成する言説が物質的なものを巻き込み、構成される言説を実現するということを、原理Ⅱを介した原理Ⅰの実現として、つまり環境の内なる社会の「存在」の実現として、理論的にどのように整理したらよいか。このように問うてみると、ラクラウとムフの議論にはこの問題に答える有効な道具だてがないことに気づかされる。ラクラウ、ムフにあっては、そもそも社会・環境関係が理論構成の主題ではないからである⁽¹⁵⁾。また、ここまでのところでは「構成される言説」はその用語が示すように受動的な位置に置かれただけであり、先にシステム・環境世界関係の水準に対応するとは述べたが、そのことはまだ社会的次元に即した形では展開されていない。そこで、我々としては、ラクラウとムフが言説（構成する言説）を言説性のフィールドという場に位置づけたように、構成される言説にも、それが位置づけられるべき場を与え、構成される言説が社会・環境関係の中でも理論的意味を探ってみる必要がある。

この点について本稿では、ラクラウとムフによるマルクス主義理論に対する鋭い批判に照らしてみると意外なことと思われるだろうが、「土台（下部構造）－上部構造」という枠組を導入してみようと思う。ただし、土台＝経済による上部構造の決定という経済決定論の枠組としてではない。次のゴドリエの指摘に基づき、その方向でこの枠組を発展させることを試みる。「マルクスの用いた基礎 *Grundlage* と上屋 *Überbau* という用語を、下部構造、上部構造と訳したのはまずかった。イバーbauとは、基礎、

グルントラーゲの上につ、構築物、建物にほかならない。ところで、人が生活するのは家のなかであって、基礎のなかではない。したがって、上部構造を貧弱な現実におしとどめるところか、マルクスの用語を別に正しく翻訳すれば、上部構造の重要性がきわだったことだろう…」[Godelier 1984=1986 : 7-8]。

ゴドリエは人間の「生」とその「生き方」（もちろん、これは個人的レベルではなく社会的レベルでのことであるが）との関係で「土台（下部構造）－上部構造」を理解している。ゴドリエにとって、上部構造とは人間が主体的・主観的に生きている領域、人間の「生き方」の領域であり、土台（下部構造）とは、この上部構造が成り立つためにはそれを踏まえねばならぬ制限、いわば「生き方」は「生」の実現であるといった意味での上部構造に対する限定であり、上部構造の中で人間が生きながら同時に即自的に実現していなければならない前提である。上部構造にはそれ固有の自律性が存するが、それは恣意性ではなく、「生」という土台を実現するものでなければならないという絶対的な限界が常に課されているのである。また、建物の場合と同様に、上部構造において生きる人間にとっては土台が直接的には不可視であるように、人間の生そのものといったものが人間に対して直接提示されているわけではないが、どのような生き方もそれが「生き」方である限り、人間の生の実現でなければならないのである。

さて、以上のような理解に基づいて、「土台－上部構造」という枠組を言説としての社会という理論の中に組み込んでみよう。社会の中で人々の「生き方」を規定するのは実践を導く言説、すなわち原理Ⅱと対応づけられる「構成する言説」である。そこで、この「構成する言説」は上部構造という位置を占めることになる。

そして、そこにはそれ固有の自律性があるのだが、それは先の言説性のフィールド→アーティキュレーション→言説という、言説の形成に固有のメカニズムである。

これに対して「土台」＝人間の生の場とは、このような上部構造＝「構成する言説」が展開し、人間も含めた物質的な世界・自然の秩序と交わる場である。この交わりにおいて物質的世界・自然の秩序は「構成される言説」を自らの中に孕むことになり、逆向きに言うとそれは「構成される言説」と同一化される。そして、この土台における「構成される言説」が実際に実現可能で、それによって人間の存在が可能たらしめられるのでなければ、そこには社会（構成する言説）は存在しえない。ここに、土台に位置する「構成される言説」の「構成する言説」に対する作用がある。それは原理Ⅰの実現というそれ固有の意義を土台という場において受け取るのである。

ところで、土台は構成する言説が人間も含めた物質的世界・自然的秩序と交わる場であると言ったように、土台＝構成される言説ではない。それは生身の人間と環境世界には還元されえない自然とが作る地平であり、そこにおいて構成する言説が作用し構成される言説を実現する場である。しかし、そうであるならば、まさにそのことにより、ここにおいて構成される言説を孕みながらもそれを越えた自然と人間の関係が、自然の環境世界化を逃れつつ伏在する、ということにもなる。土台とは、構成される言説の実現によって、人間・社会が自然の中で生きることによって、構成される言説には還元されえない成立する言説が生まれる場でもあり、それによって矛盾が生み出される場でもあるのである。このように多元的な作用を孕んだ問題領域として土台という場は存しており、それは原

理Ⅰ、Ⅱと同時に原理Ⅲも作用している場であるということになる⁽¹⁶⁾。

以上、構成する言説＝上部構造が土台という場で展開して人間の生を実現すること、それにより土台において構成する言説と構成される言説と成立する言説が作用しあうこと、こうした位置づけをもった言説の展開が社会・環境関係を作り上げる、と整理できる。

(4) 重層的決定と言説としての社会・環境関係の複合性

以上のように、ある言説に関する三つの水準の区別・位置づけを一応果たしたところで、これまでは括弧にくくっておいた重層的決定の問題を呼び出すことにしよう。まず、そもそも重層的決定とはいかなることか。このことに答えるため、もう一度構成する言説の形成について想起してみよう。

先に見たように、この言説の形成の機制は、差異を固定化・編制するアーティキュレーションであった。このアーティキュレーションはヘゲモニックなものでしかないが、ヘゲモニックなものとしてであれ、ある構成する言説がそれにより形成されているならば、それはこのアーティキュレーションによって規定されたものであり、従ってこの言説を形成している個々の契機はこのアーティキュレーションの表現であるということになる。従って、構成する言説というのはアルチュセールの表現を借りると、表出的因果性によって支配されているということになる⁽¹⁷⁾。この構成する言説が土台と交わり実現することになる構成される言説は、この構成する言説により支配されているのだから、究極的には構成する言説同様アーティキュレーションを原因・本質とする表出的因果性に支配され

ていることになる。

では、この表出的因果性によって支配された言説（構成する言説＋構成される言説）が重層的決定を行うとはいかなることであろう。そもそも重層的決定ということが言われるのは、次の二つの条件が満たされる場合である。第一に、問題となる複数の言説が——それぞれの言説を支配しているアーティキュレーションが——共約不可能であるということである。仮に共約可能であるとする、それらはいずれかの言説に還元可能であり、そこに成立しているのは実際には単一の言説の支配、表出的因果性による決定、ということになる。第二に、お互いに共約不可能でありながら、それら言説は相互に無関係ではなく、そこに何らかの作用が働いているということである。でなければ、ばらばらの言説の併存があるだけである。では、このような作用とはどのようなものか。

まず、ある一つの構成する言説が土台において構成される言説を実現するという場合、それは土台に存する人間も含めた物質的存在に構成する言説を織り上げている契機を担わせること、つまり物質的存在を編制されたシニフィアンの担い手としてシニフィアンと同一化し、それによって物質的存在を意味的世界へと巻き込むことである（これは機制としては環境の環境世界化と同様）。ところが、土台に複数の構成する言説が交わるときには、物質的存在は同時に複数の構成する言説によって照準される。この時、ある構成する言説が照準した物質的存在が同時に他の構成する言説によっても別の仕方で照準され、それによって複数の構成する言説の契機（シニフィアン）が物質的存在へと担われ、それを介して相互に向かい合うという事態が生じる。つまり、複数の構成される言説同士の土台における側面的な関係を通じて、上部

構造の複数の構成する言説同士にも側面的な関係が生まれる。ここに、言説（構成する言説＋構成される言説）横断的なシニフィアンの配列が新たに出現することになる。それは文字通り、それぞれの（構成する言説と構成される言説のカップルからなる）言説という層を貫いて重層的に成立するシニフィアンの配置であり、個々の構成する言説の作用には解消しえない、いわばすべての（各々が構成する言説と構成される言説からなる）言説の共同作業の結果として出現するものである。このことはまた、個々の構成する言説に準拠してみると、言説横断的なシニフィアンの配列によって実現される言説間の布置関係により、側面から新たな作用を被るといふこと、それ固有の表出的因果性の方向とは別の方向に働く力の作用を被るといふことである。新たなシニフィアンの配置はそれを生み出すことになった各言説から遊離するのではなく、各言説の内部、構成する言説へと跳ね返り、各言説はそれにより自らの内部に他の言説との相互作用による緊張関係をはらみ、それに抗いながら自らを実現しようとするようになる。

以上、重層的決定についてまとめると次のようになる。構成する言説の作用は、土台において実現される構成される言説間の側面的関係（物質的存在の側面的編制）を媒介として、新たなシニフィアンの編制関係を共同して作り上げる。このことが逆に、個々の構成する言説のそもそものシニフィアンの編制へと作用してそれを横滑りさせていこうとする。これに対し、個々の構成する言説は複数の言説の共同作業の結果である側面からの影響に抗いながら自らを貫徹しようと試みていく。この緊張関係を伴いつつ行われる諸言説の共同作業が重層的決定である⁽¹⁸⁾。

さて、このように重層的決定を理解すると、

改めて「構成する言説＋構成される言説」と「成立する言説」との関係が、ただし新たな姿で、浮上してくる。先に、ラクラウ、ムフの議論の動揺を読みかえ、構成する言説と構成される言説という区別を引き出したとき、さらに構成される言説を含みながらもそれを越えて成立する言説（「成立する言説」）を補足した際には、それは単一の構成する言説を軸とした作用に対して、その作用にさらされながらもそれを越えていく過剰な関係を指し示すものとして措定されたのであった。つまり、土台において単一の構成する言説が人間も含めた物質的存在と交わるとき、「構成する言説＋構成される言説」との同一化作用に対して矛盾を孕みながら抗うものとして位置づけておいた。しかし、重層的決定という機制が働くここ社会的レベルにあっては、それだけではなく、重層的決定を通じて個々の「構成する言説＋構成される言説」を越える言説横断的な関係性が、すなわち言説が成立してしまう。個々の「構成する言説＋構成される言説」というカップルからみると、構成する言説が土台において構成される言説を実現するとき、重層的決定という作用のもとに置かれているために、構成される言説は構成されるや否やいつのまにか横滑りさせられていき、別の関係性・言説にからめとられてしまうのである。しかしここでも、システム・環境関係における記述と環境世界とリアルな環境との間に見出されたのと同様な機制が作用する、すなわち、構成する言説は、土台において構成される言説として展開するとき、それを自らと同一化しようとする、あるいは土台を構成される言説に一元化しようとするが、この土台にあっては重層的決定を介して構成される言説以上の成立する言説が実現してしまう、しかし、構成する言説はこうした差異にもかかわらず同一化・一元化

を試みるために、構成される言説を介して構成する言説と成立する言説との間に矛盾が生み出されるのである。

以上、社会・環境関係の複合的性格が明らかになった。ここには、個々に取り上げた場合の、構成する言説・構成される言説・成立する言説の「土台-上部構造」における関係、いわば垂直方向での構成・同一化・矛盾という関係があり、また、土台における諸々の構成される言説同士の水平的関係により展開する重層的決定に由来する、構成する言説・構成される言説・成立する言説間の構成・同一化・矛盾といった関係が展開しているのである。社会・環境関係というのは、このような二方向での諸言説の複合的な運動体として把握されることになる。

(5) 矛盾・ノイズ・ヘゲモニー

以上のごとく、言説としての社会という考え方は、土台・上部構造という枠組や重層的決定という独自の道具立てを用いつつ、システム・環境関係について引き出された三つの水準の問題を社会・環境関係という問題領域において展開する能力をもったものであり、我々はその骨組みを描くことができた。しかし、我々は諸言説の関係の中に矛盾を位置づけたが、いまだ位置づけただけであり、原理Ⅲのようなノイズを介した構造転換という問題にまでは踏み込んでいない。最後にこの点を論じて本稿の結びとしたい。

先に確認したおいたように、ノイズからの秩序という原理Ⅲは、それがもつ一般性・抽象性の故に、システムの構造転換はシステムにとっては処理できないシステム外的で異質な要素(ノイズ)が引き金となるということを主張するだけで、実際の構造転換の機制にまでは踏み

込むものではなかった。では、「社会=言説」論は、こうした方向にどのように踏み込むことができるだろうか。

ところで、そもそもノイズからの秩序原理は逆説的な原理である。先にも指摘したようにノイズというのはシステム相関的に、ネガティブに規定されるものである。いわばシステムという図を描くことによってその回りに広がることになる地である。このような地が図の中に入り込むとは一体どういうことだろうか。それはそもそも不可能なことではないのか。

このシステムとノイズの逆説的な関係を転位させるところに成り立つのがラクラウ、ムフのヘゲモニー論である。そもそも原理Ⅲの逆説・不可能性は、システムを厳然として確定されたものとするところにある。システムを決定的に描かれた図のように考えると、それはノイズなど受けつけない。システムという図が決して描ききられてはいないのであれば、つまりシステムが存在すると言われるその時にも当のシステムがシステムとして確定されているわけではないのであれば、一旦は締め出されたかに見えるものもシステム内に侵入可能である。ラクラウとムフが言説をヘゲモニックなものと規定するとき行っているのがまさにこのことである。言説をヘゲモニックなものと規定することは、言説を決定的に描ききることは不可能だということ、それは描かれるとともに消えてゆき、また常に描き直されねばならないものだ、とすることだからである。この不可能性は言説(構成する言説)にとって不可避である。というのも、先述のように、言説が自らを描かねばならない場である言説性のフィールドは、キャンパスの如く不動ではなく、水面のように流動たえまないからである。ヘゲモニーという概念に即した表現をすると、言説は言説性のフィールド

という戦場の中に獲得された陣地のようなものである。陣地として獲得されている限りでは、それはこの戦場におけるヘゲモニーの獲得である。しかし、それは、常に、当該言説を構成する契機ではない過剰な差異という敵により包囲・攻撃されている。しかも戦場の本性からしてここでは戦闘が果てることがない。獲得されたかに思われるヘゲモニーも常に絶えざる闘争（ヘゲモニー闘争）の過程の中にのみあるのである。ところで、この闘争の相手とは言説にとって自らの契機ではないものであった。それは原理Ⅲが言うところのノイズに他ならない。従って、ヘゲモニックな言説とは常にノイズに包囲されノイズに対抗しつつ実現されているものであり、ノイズを通じた構造転換とは、このヘゲモニー闘争を通じたヘゲモニックな言説の転換ないしは新たなヘゲモニックな言説の形成と理解することができる。それ故、ラクラウ、ムフのヘゲモニー論とは、原理Ⅲの逆説・不可能性を、構成する言説の逆説・不可能性として転位することで、原理Ⅲをヘゲモニー闘争として社会的に積極的に定位したものと評価できるのである。

では、これまで検討してきた三つの水準をもった諸言説間の重層的決定関係という領域において、このヘゲモニー闘争による構造転換はどのように位置づけられるであろうか。最後にこの点を確認しよう。

本稿でなされた議論ではノイズの源泉は土台に孕まれる矛盾として位置づけられていたが⁽¹⁹⁾、矛盾には垂直方向での三つの水準間の運動に起因する矛盾と、水平方向での重層的決定に由来する矛盾とがあった。このことに対応して、構成する言説が置かれているヘゲモニー闘争には二つのタイプがあるといえよう。まず第一に、垂直方向での矛盾が垂直方向でノイズ

と化し、構成する言説に侵入する場合である。この場合には、どのような構成する言説が言説として顕在化されるかが直接賭けられている。その際、ノイズを通じた構造転換が実現されるとすれば、そこにはノイズをそれまでのヘゲモニックな言説が取り込み自ら構造転換を実現するという場合と、ヘゲモニックな言説からみればノイズであるものを自らの契機として組み込んだ対抗的な言説が現れ、相互にヘゲモニーを争うという場合もあろう。第二のタイプは水平方向での重層的決定による矛盾を介したヘゲモニー闘争である。この場合には、言説横断的に成立したシニフィアンの配列 — それは、個々の構成する言説を越えている限り、構成する言説にとってはノイズをはらんでいる — を介して、それぞれの構成する言説が攻撃・変成させられるという形で、構成する言説の構造転換は実現されることとなろう（もう一つ、垂直方向で生み出された矛盾が、その垂直関係からは直接は外れたところで別の言説として実現され、それが重層的決定を介してそもそも矛盾を生み出すことになった構成する言説に作用する、という場合も可能性としては考えうるが、ヘゲモニー闘争による構造転換のタイプとしては第二のものに帰着する）。また、第一の垂直的關係を通じてなされたある構成する言説の構造転換が、第二の水平的關係を通じて他の言説の構造転換を導くということもあれば、第二の水平的關係を通じて変成・転換した言説が、そのことにより垂直方向での矛盾を拡大させ、ここからさらに構造転換を迫られるなどといった複合的な場合も考えられるだろう。いずれにしても、矛盾は矛盾として直に構造転換を実現するのではない。それは常にヘゲモニー闘争を通して実現されるのである。従って、環境の中にある社会の構造転換という問題に直接取り組む際に

は、ヘゲモニー闘争の布陣・その担い手である主体（性）・そこにおける社会科学の意味（中立性とか介入）等々といった問題が現れてくることになろうが、これらは本稿の射程を越えており、ここではこうした点を確認することにとどめたい。

以上、ラクラウ、ムフの理論は、社会＝言説をヘゲモニックなものとして理論的に構成することにより、ノイズからの秩序原理を社会（ここでの問題関心からすると社会・環境関係）の本性として組み込むことを可能としているのであり、単にシステムに異質な要素に構造転換の可能性を託すのではなく、それをヘゲモニー闘争という社会的事象として積極的に位置づけているところにその卓抜さがある。これにより、社会・環境関係は、垂直・水平方向での諸言説の複合的な関係がおこなう全体として、しかも矛盾・ノイズ・ヘゲモニー闘争・構造転換という動的関係をその本性として身に帯びた全体として描き出されることとなる。このような全体像についての枠組によって具体的な社会像にどのようなようにどれだけ迫ることができるのか、というところまではまだ多くのへだたりが残ってはいるが、とりあえず最初に設定した全体像の描出という目標には到達できたものと思う。

（本研究は、文部省科学研究費補助金による研究成果である。）

注

(1)本稿とは別の問題領域を設定し、そこにおいてラクラウとムフの議論を展開した場合、そこから得られる成果がどのようなものとなるのかを予見することは不可能である。本稿はあくまで「一つの」試みである。

(2)本稿の限界もここから既に明らかであろう。より一般的なシステムと環境のレベルでは現れない社会・環境関係に種差的な問題が存在するの否か、存在するならばそれにどう取り組めばよいのか、といった問題は、本稿の射程には含まれていないからである。しかし、システム・環境関係についてのより一般的な理論を自らのものとすることができずして、社会・環境関係についての種差的理論を展開するなど主張することはできないであろう。

(3)ここでは「自己組織系」という用語は通常の使用とは異なった仕方、全く外部の環境との接触をもたずそれだけで自らを支えているシステムといった意味で用いられている。「自己組織」という言葉から、システムがあたかも永久機関のようにすべてを自らの内部で賄いつつ独立自存するかのよう受け取られることを警戒してこのような表現を用いたのであろう。

(4)ここで、社会について論じることは議論の順序を逸脱することになるが、あらかじめ注意しておく、この原理が主張されるとき、その根拠となっているのは閉鎖的なシステムについての熱力学の第二法則、いわゆるエントロピーの増加法則であるが、社会システムについてエントロピー概念が適用される場合には厳密な議論を欠いたままアナログ的に適用されている場合が多く、また実際そのように批判されている。しかし、社会システムについて物理学的なエントロピー概念をそのまま適用することが不可能であるとしても、社会が人間の存在を前提とし、人間の存在が外部との物質代謝を不可欠としている以上、社会システムを考える際にもこの原理を欠かすことはできない。類比的に用いられているのであれ、そのことを忘れさえないければ、エントロピー概念の社会への拡大・適用は、社会と実在的な環境との現実的な関係が社会の存在論的な前提であるということ

再確認するという意義を持っている。

- (5)この点については、次節でやや詳しく紹介する。
- (6)このように、ここでシステム・環境関係と一口にいても環境の意味は一様ではない。それは、システム・環境関係が複合的なものであり、そこには様々な次元が含まれているからである。このような異なった意味・次元をもつ環境とシステムとの関係を統合したシステム・環境関係の複合的な像を描くことが2. 節の課題となる。
- (7)マトゥラーナとヴァレラによると、神経システムは、環境のような「介在要因とは無関係に、ニューロンの相互作用ネットワークとしてネットワークの構成要素であるニューロンの相互作用によって規定されている」[Maturana & Varela 1980=1991 : 148]。
- (8)原理Ⅰは「秩序からの秩序原理」とも呼ばれていたが、これは、システムによって環境世界として構成された秩序から負エントロピーという秩序が摂取されることで、システムという秩序が作り出される、という意味なのである。
- (9)この視点の移動については、マトゥラーナとヴァレラ[1984=1987 : 89-93]参照。
- (10)システムが存在しそれが環境世界化を行うことで初めてノイズとか環境世界を越えたリアルな環境ということは問題として、システムが作り出す影のように現れてくるのだから、原理Ⅲは、具体的な場面ではともかく、一般的にはネガティブな形でしか論じられないのである。なお、先の図1と図2を組み合わせると、原理Ⅰ×Ⅱ×Ⅲの関係を図示することも可能であろう。その際には、図1のリアルな環境と環境世界との間に矛盾と記し、そこから発してシステム内的な記述の円環の中心へといたる線を引き、この線上に図2のようにノイズと記し、この線の到達点にコード変換と書くことができるだろう。
- (11)「審級」という用語を用いたが、アルチュセー

ルのように最終審級や支配的審級という問題をここでは考えてはいない。また、最初から審級の数や性格を決定しておこうというつもりもない。これらはむしろ、現実の社会の研究を通じて検討されるべき問題であろうからである。相互にその顕在化を巡り直接闘争し合うのではない言説同士の関係を指すことだけがここではこの表現に託されている。なお、どのような場合に諸言説は審級を同じくする／異にするのか、という問題があるが、現段階で私に言いうるのは、相互に否定的な関係にあるような言説、後の議論を先取りして言うと、一方の「構成する言説」に導かれた「構成される言説」が実現することが、他方の「構成する言説」により導かれる「構成される言説」の実現を不可能とするような関係にある言説同士が直接同一の審級においてその顕在化をめぐる闘争しあう、ということだけである。

- (12)[Geras 1990], [Wood 1984]等が代表的例である。
- (13)バレーは、ラクラウとムフの議論を批判から擁護して、「強調しなければならない点は、言説は「リアル」であるということである」[Barrett 1991 : 76]と主張しているが、ラクラウとムフが構造主義を静態的であると批判し、シニフィアンのはりの中での意味の生成ということに準拠しているのであれば、我々は、「言説はリアルになるのだ」と言わねばならない。言説が記号的なものも物質的なものも巻き込みながらリアルな世界として成立してくる、この成立そのものこそ問題にされねばならないのだ。ラクラウとムフによる言説概念の拡張は、この問題を逆に覆い隠すことにもなりかねないのである。
- (14)「成立する言説」を「言説」と呼ぶことの妥当性が疑問視されるかもしれないが、ラクラウとムフは言説を先に紹介したように非常にゆるやかな意味で用いており、社会と環境との間になんらかの関係が成り立っているとすれば、それを言説

と呼ぶことはラクラウとムフの用語法に反するものではなからう。

(15)従って、この点をもってラクラウ、ムフを非難しようというのではない。そのようなことは全く的外れであろう。

(16)システム・環境関係について論じた際には、環境世界とリアルな環境を含めた広い意味で環境という言葉を用いることで充分であったが、社会的レベルでは構成する言説が展開する場を環境と言うのでは充分ではない。そこでは人間も含めて物質的な地平が問題だからである。あるいはシステム論的にシステムを構成するもの以外の全変数として環境を定義し、人間もまた構成する言説としての社会にとっては環境であるということも可能であるが、この場合には構成する言説が交わる物質的地平という次元を越える世界を環境は含むことになり — 構成する言説としての社会にとっては、編制されていない浮遊するシニフィアンも環境である — 本稿での問題構成からみると不適切である。環境にかえて「土台—上部構造」という枠組を新たに導入した所以はこうしたところにある。

(17)アルチュセール後にあつては、「表出的因果性」

を持ち出すことは奇異に感じられるかもしれない。しかし、アルチュセールは表出的因果性を全く妥当性をもたないものとして退けたわけではなく、社会の全体像を描く論理として退けたのであり、それに代えて重層的に決定された複雑な全体性を提起したのである。個々の言説について見る限りでは、それはアーティキュレーションによるのであるから、言説をなす個々の契機はアーティキュレーションの操作をそれぞれの位置において表しているはずである。この点についてまで表出的因果性を否定すると、そもそも言説は成立しえないことになる。

(18)重層的決定によって成立する全体性は表出的ではありえない。仮に言説間の共同作業が一つの言説を構成したとしても、各言説はその言説に解消されることなく固有の作用を発揮し続ける。そこには常に一つに還元されえない複数の言説の作用が存在する。

(19)一般に社会を考えるにあたって、どのような場合にもノイズの源泉はこれまで論じてきたような意味での矛盾にあるというわけではないのは、原理Ⅲを論じたとき注意したのと同様である。

文献

Atlan 1972 'Du bruit comme principe d'auto-organisation', *Communications*, 18

—— 1974 'On a formal Definition of Organization', *Journal of Theoretical Biology* 45

Barrett, M. 1991 *The Politics of Truth: From Marx to Foucault*, Polity Press

Foerster, H. von 1981=1984(2nd Ed.) *Observing Systems*, Intersystems Publication

Geras, N. 1990 *Discourses of Extremity*, Verso

Godelier, M. 1984 *L'idéal et le matériel; Pensée, économies, sociétés*, Fayard = 1986 山内昶訳『観念と物質 思考・経済・社会』、法政大学出版局

Laclau, E. & Mouffe, C. 1985 *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, Verso = 1992 山崎カヲル・石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治』、大村書店

Maturana, H. R. & Varela, F. 1980 *Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living*, D. Reidel Publishing Company

= 1991 河本英夫訳『オートポイエーシス—生命システムとはなにか』、国文社

—— 1984 *El árbol del conocimiento*, Editorial Universitaria, Santiago = 1987 管啓次郎訳『知恵の樹』、朝日出版社

田中宏 1992a 「構造—イデオロギー—関係の転換」、『思想』八月号

—— 1992b 「言説としての社会とリアリティ」、『ソシオロギス』No.16

Wood, E. M. 1984 *The Retreat from Class — A New 'True' Socialism*, Verso

(たなか ひろし)

不朽の名著『自由からの逃走』の著者で
今世紀最高の精神分析・社会学者の全貌！

評伝 エーリッヒ・フロム

G・ナツプ／滝沢正樹・木下一哉訳
フロムの世界観Ⅱ人道主義的社会主义の成立過程を読み
とく。朝日新聞他各紙誌にて紹介！
定価 3296円

環境と文明

【環境経済論への道】
湯浅越男 文明の興亡をもたらした人類と環境との関係
を描く現代人必読の書！
定価 3605円

資本主義・社会主義・エコロジー

アンドレ・ゴルツ／杉村裕史訳
ポスト産業時代における資本主義超克の具体的な戦略を
提起する、話題のゴルツ最新作。
定価 2575円

文化・開発・NGO

「ルーツなくしては人も花も生きられない」
T・ヴェルヘルスト／片岡幸彦監訳
求められる真の国際貢献のあり方。
定価 3399円

境界線を破る！

【エコ・フェミ社会主義に向けて】
M・メラ／壽福眞美・後藤浩子訳
現代文明の重要なパラダイム転換。
定価 3296円

ハーバースと現代

藤原保信・三島憲一・木前利秋編
壮大な社会理論の構築を目指すハーバースの思想的核
心に迫る！
好評重版出来
定価 3605円

〒169 東京都新宿区西早稲田3-16-28

新評論

☎03-3202-7391 振替・東京6-113487